

パニウム - 第十三番

パニウムへの回帰

Jeff Pippenger

2026-02-17

カイサリア・フィリッピからカイサリア・マリティマへと至る途上、主の変容の山に立ち寄りつつ、ペテロは、レビ記二十三章の二十二節から成る二本の線に基づいて構築され、キリストの時代のペンテコステの季節と連動するその線において、ラッパの祭りという道標に到達する十四万四千人を象徴する。レビ記二十三章、十字架、ペンテコステ、そしてコルネリウスがペテロを呼びに人を遣わしたことは、第三時・第六時・第九時という象徴性のもと、線に線を重ねて結び合わされる。

十字架上における第三時・第六時・第九時のキリスト、ペンテコステにおける第三時および第九時のペテロ、ならびに第九時のコルネリウス、ヨッパにおける第六時のペテロ、さらにカイサリア・フィリッピにおける第三時は、ダニエル書11章13~15節と連関する。というのも、カイサリア・フィリッピはまたパニウムでもあるからである。

ペテロは五旬節にヨエル書を説き明かしていた。また、ペテロがコルネリオの家の者たちに説教を行ったとき、聖霊は、五旬節にユダヤ人たちの上に注がれたのと同様に、異邦人の上にも注がれた。ユダヤ人に対する、そしてその後異邦人に対する聖霊の注ぎは、終わりの日における聖霊の注ぎを型を示していた。終わりの日の注ぎは二段階であり、9/11における振りかけから始まって、やがて真夜中の叫びの宣言へと進展し、それは日曜法にまで至り、そこで第三天の大きいなる叫びとなって、後の雨が限りなく注がれる。

それゆえ、シオンの子らよ、喜べ。あなたがたの神、主にあって歓喜せよ。彼はあなたがたに初めの雨をほどよく与え、また、第一の月に、あなたがたのために、雨-すなわち初めの雨と後の雨-を降らせられる。打ち場は麦で満ち、搾り場はぶどう酒と油であふれ流れる。わたしは、わたしがあなたがたの間に遣わした、わたしの大きいなる軍勢である、いなご、尺取虫、いもむし、刈り取る虫が食い尽くしたその年々を、あなたがたに償う。ヨエル書 2:23-25

ペテロは、9/11から日曜法に至るまでの、先行する穏やかな注ぎかけの歴史に参加する者たち、ならびに、破壊された、ラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチズムの激化する反逆の四世代を表す「年」を回復する後の雨に参加する者たちを代表する。神殿において第九時に、ペテロは、ヨエル書の「年の回復」を提示した。

それゆえ、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、主の御前から潤いの時が訪れるとき、あなたがたの罪はぬぐい去られるであろう。主は、先にあなたがたに宣べ伝えられたイエス・キリストをお遣わしになるであろう。この方は、万物が回復される時まで、天に受け入れられていなければならない。その時については、世の初め以来、神がご自分のすべての聖なる預言者たちの口をもって語ってこられたのである。モーセは確かに父祖たちに言った。「あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのようなひとりの預言者を、あなたがたのために起こされる。彼があな

たがたに語るすべてのことについて、あなたがたは彼に聞き従わなければならない。」そして、その預言者に聞き従おうとしないすべての者は、民の中から断ち滅ぼされることになる。まことに、サムエルから後に続くすべての預言者も、語った者はみな、同様にこれらの日々を前もって告げたのである。使徒行伝 3:19-24.

罪の消し去りは、調査審判におけるキリストの最後の御業であり、その消し去りは神の家から始まる。

神の家から裁きが始まるべき時が来た。まず私たちから始まるのなら、神の福音に従わない者たちの終局はどうなるのか。義人が辛うじて救われるのなら、不敬虔な者と罪人はいったいどこに立つことができようか。ゆえに、神の御心に従って苦しむ者たちは、善を行いつつ、忠実なる創造主に、自らの魂をゆだねるがよい。第一ペテロ 4:17-19

ペテロは、ペンテコステにおいても、また海辺のカイサリアにあるコルネリオの家においても、ヨエル書が成就しつつあることを悟った。ペンテコステは、神の家に対する裁きが完了し、そののち裁きが異邦人へと移る時、すなわち日曜法を象徴している。彼が日曜法の時に宣べ伝えるメッセージは、真夜中の叫びの到来時に宣べ伝えられるメッセージと同一である。アルファの宣言は、オメガの宣言によって終わる預言的期間の始まりである。ペテロはそのメッセージを宣べ伝える者たちを代表しており、そのメッセージは権能の賦与によって開始され、その賦与はイスラムのろばが解き放たれることによって印づけられる。ろばは真夜中の叫びの始まりを標するために解き放たれ、また真夜中の叫びの終結である日曜法において再び解き放たれる。

ゆえに、ペテロはまた、イスラームによるアメリカ合衆国への攻撃を予言した者たちをも象徴している。真夜中の叫びにおけるペテロのメッセージは、最初の失望と遅延の時の始まりを画したメッセージの是正である。したがって、ペテロは、真夜中の叫びのメッセージを宣べ伝え、ダニエル書11章14節の成就として2024年に到来し、2025年5月8日に最初のアメリカ人教皇の選出をもって結末を迎えた最初の基礎的試練を通過した者たちをも象徴している。

レビ記二十三章によって表象されるペンテコステ期において、ラッパの祭りから五旬祭に至る期間は、第三の、かつ試金石となる試験である。

ホワイト夫人が指摘した三天使の原則は、同時に、単純な算術でもある。

彼女は、第一と第二なしには第三のメッセージはあり得ないと明言する。ペテロはペンテコステにおける日曜法においてヨエル書を宣べ伝えるゆえに、ペンテコステ期における第三の、かつ試金石となる試験である「真夜中の叫び」のメッセージの宣布の開始においても、またヨエル書を説く。それゆえペテロは、イエス・キリストの啓示の封印が解かれたとき、すなわち2023年12月31日に始まった三段階の試験過程において、忠実な者たちを表象する。もしペテロが第三段階にいるのであれば、第一と第二なしには第三はあり得ないのだから、彼は必ずその前の二段階も歩んできたはずである。

十四万四千人の封印の期間は9/11に開始し、基礎へと立ち返るよう呼びかける9/11のラッパの呼び声によって表される三段階の試練の過程が開かれ、ついで2020年7月18日の第一の失望の試練が到来した。この歴史における第三の試練は日曜法である。2020年7月18

日に預言的な荒野の時代が到来し、その荒野の期間のうちに、2023年7月には「声」が叫び始め、さらに9/11から二十二年後にあたる2023年12月31日に、イエス・キリストの黙示の封印が解かれ始めた。2023年から日曜法に至るまで（その時、2,300日の完全な成就が成し遂げられる）という期間は、「23」で始まり「23」で終わるものとして識別される。というのも、1844年10月22日の閉ざされた戸が、日曜法における閉ざされた戸を予表しているからである。

2300年の預言は、「2,300」における「23」によって表されている。

1844年は、第一の天使と第二の天使の歴史の終わりであった。その歴史は1798年に第一の天使が到来したことに始まり、四十六年後の1844年に終わった。その四十六年間は、キリストが1844年に突如として入られたミラー派の神殿を表している。人間という神殿は、男女ともに「23」本の染色体に基づいて設計されており、したがって「23」は、キリストが1844年に始められた働きの象徴となっている。その働きとは、御自身の神性を私たちの人性と結合することであった。イエスは自然界を用いて霊的事柄を説き明かし、二千三百年の終結である1844年に始まったその働きは、「23」本の男性の染色体と「23」本の女性の染色体の結合によって表されている。男が女と結婚するとき、彼らは一体となる。そしてその婚姻こそが、キリストが1844年に始められたことである。1844年の閉ざされた戸は日曜法の閉ざされた戸と一致し、その閉ざされた戸の象徴は「23」である。

2023年12月31日から日曜法における「23」に至るまでの間は、アルファの「23」で始まり、オメガの「23」で終わる期間を指し示している。それはまた、十四万四千人の神殿の期間をも表している。まさしくその同じ歴史は、9/11から日曜法に至る歴史のフラクタルである。1844年は「23」という数で表象され、死者の調査審判の始まりを指し示す。9/11は生者の調査審判の始まりを指し示し、ゆえに9/11もまた「23」という数を有する。9/11から日曜法に至る期間は、アルファの「23」で始まり、オメガの「23」で終わる期間である。2023年から日曜法に至る期間は、9/11から日曜法に至る期間のフラクタルであり、そこにおいて十四万四千人の神殿が建て上げられる。ミラー派の神殿は四十六年の期間であったが、終わりの日には、時はもはやない。そして、アドベンチズムの初めにおけるミラー派の四十六年は、アドベンチズムの終わりにおける同一の期間を予表しており、その期間は「23」で始まり「23」で終わって、ミラー派の数である四十六を生み出す。

それら三つの歴史はいずれも、三段階の試練の過程（ミラー派、9/11から日曜法に至るもの、そして2023年から日曜法に至るもの）を表している。その歴史は、2023年12月31日にモーセとエリヤを復活させたミカエルのラッパの響きによって始まった。そして、ミカエル（すなわちキリスト）が復活を行うとき、それはラッパの響きをもってなされる。

主ご自身が、号令と大天使の声と神のラッパの響きとともに、天から下って来られ、キリストにある死者がまずよみがえる。テサロニケ人への第一の手紙 4章19節。

ミカエルは大天使であり、神のラッパとともに復活させるのは彼の声であり、また『ユダの手紙』は、ミカエルがモーセを復活させたことを我々に伝えている。

しかし大天使ミカエルは、悪魔と争い、モーセのからだのことで論争したときでさえ、彼をののしって訴えることはあえてせず、ただ「主があなたを戒められるように」と言った。ユダの手紙 1:9

キリストは、大天使ミカエルとして、2023年12月31日にご自身に関する啓示の封印を解かれ、そのとき、2020年7月18日に殺された二人の証人であるモーセとエリヤを復活させられた。ついで、アルファの外的な土台に関する試練が到来した。9/11に降臨した天使は、忠実な者たちをミラー派の土台へと呼び戻しつつ、エレミヤのラッパを吹き鳴らしたが、それと並行して、ミカエルのラッパが土台の試練をもたらした。この試練はダニエル書11章14節によって表されており、そこでは「あなたの民の略奪者たち」が外的な幻を確立する。ミラー派は、この節を成就したのはローマであると特定し、その幻を確立した。

2025年5月8日より、隅のかしら石および礎石の上に神殿の建立が始まった。1989年に封印が解かれたメッセージが正式に確立された1996年から三十年を経て、2023年12月31日に封印が解かれたメッセージを正式化する過程が開始された。

1989年のメッセージの1996年における定式化は、その歴史的テーマが1776年に到来してから二百二十年後のことであった。2023年の開封は、イスラームの預言的顕現を通して1996年の定式化が2001年9月11日に確認されてから二十二年後になされた。

ペテロは、この聖史に属する、基礎と神殿の双方の試験を通過する使者たちを代表する。神殿の試験には、2020年7月18日の失敗したメッセージの訂正が含まれる。1989年のメッセージが1996年に公式化されてから三十年後、神殿の試験には、テネシー州ナッシュビルに対するイスラームによる攻撃に関するメッセージを訂正し、その後それを再宣言するという働きが含まれている。1989年のメッセージの公式化は、1996年に「終わりの時」と題する雑誌が刊行されたことによって表された。その雑誌はダニエル書十一章の最後の六節を扱い、アメリカ合衆国における日曜法を特定した。

神の摂理により、数年前にすでに「Future for America」と名づけられていた休眠状態のミニストリーが、1989年のメッセージについて光を持たなかったそのミニストリーの前任の指導者たちによって、わたしたちのミニストリーに与えられた。

1996年、私たちの宣教団体は「Future for America」となり、ダニエル書11章の最後の六節において表象されているアメリカの将来を明らかにするメッセージを提示する刊行物が発行された。合衆国は1776年に預言的な台頭を開始し、その「22」年後に当たる1798年の「終わりの時」に、聖書預言における第六の王国としての役割を開始した。さらに、1776年から「220」年という節目がある。1996年には、預言における合衆国のメッセージが形式化された。1776年からの「220」年、ならびにそこから1798年までの「22」年は、ウィリアム・ミラーと結び付いている。彼は、欽定訳聖書の刊行から「220」年後に当たる1831年に、初の公開講演を行った。アドベンチズムの始まりと終わりは、ともに、「終わりの時」に封印が解かれるメッセージの形式化を強調している。

1996年から三十年後の2026年において、神殿の試験には2020年7月18日のメッセージを訂正する働きが含まれる。したがって、1996年に正式化された最後の世代のための1989年のアルファのメッセージは、メッセージの訂正と正式化のための試験をもって終わる三十年の期間を開始した。この三十年は、真夜中の叫びのメッセージを正式化する十四万四千人の祭司職の象徴である。ペテロは、第二のオメガの神殿試験の期間にその働きを成し遂げる者たちを象徴している。

ホワイ夫人は、神がご自分の民の間に誤謬が入り込むことをお許しになるのは、彼らに学ばせるためであると私たちに知らせている。

神はご自分の民を目覚めさせられる。もし他の手段が効を奏さないなら、異端が彼らの中に入り込み、彼らをふるいにかけ、もみがらを麦からより分けるであろう。主は、そのみことばを信じるすべての者に、眠りから覚めよと呼びかけておられる。今の時にふさわしい尊い光が与えられている。これは、まさに私たちに迫っている危険を示す、聖書の真理である。この光は、私たちをして、聖書を怠りなく研究し、私たちが堅持している立場を最も厳正に吟味することへと導くべきである。

この記述は、本稿全体を締めくくる一節の一部に当たる。諸稿および私たちの安息日のZoomミーティングにおいて、ダニエル書11章10節から15節の考察の中で、私はいくつかの象徴を取り違えた。必要な訂正は加えたものの、私は、パニウム——日曜法へと至る戦い——に関する連載記事を結論へと導く作業を進めることから逸らされてしまっていた。今こそパニウムに立ち返る時であり、そうするときには、パニウム、すなわちカイサリア・フィリピにおけるペテロによって表象される、もう一筋の証拠を加えることになる。

これより、第四十節の隠された歴史を例証するダニエル書第十一章第十節から第十六節の考察を再開する。九月で中断していたため、約五カ月が経過した。

ペテロは兄弟たちに、「恵みにおいて、また、わたしたちの主にして救い主イエス・キリストの知識において成長しなさい」と勧めている。神の民が恵みにおいて成長しているときはいつでも、彼らは絶えず、御言葉に対するいっそう明確な理解を得ていく。その聖なる真理のうちに、新たな光と美を見出すであろう。これはあらゆる時代を通じて教会の歴史において真実であり、終わりに至るまでこのように続くであろう。だが、真の霊的生命が衰えると、真理の知識において前進することをやめてしまう傾向が、いつの時代にも生じてきた。人々は、神の御言葉からすでに受けた光に満足して安住し、聖書のさらなる探究を抑えようとする。彼らは保守的になり、論議を避けようとする。

神の民の間に論争や動揺がないという事実を、彼らが健全な教理を堅持していることの決定的な証拠と見なすべきではない。彼らが真理と誤りを明確に識別していないのではないかと恐れる理由がある。聖書の探究によって新たな問いが生じず、真理を持っていることを確かめるために人々を自ら聖書を調べることへと駆り立てるような意見の相違も起こらないときには、昔と同様、今も多くの者が伝統に固執し、何を礼拝しているのかも知らないまま礼拝するだろう。

私に示されたのは、現在の真理を知っていると公言する多くの人々が、自分が何を信じているのかを知らないということだ。彼らは自らの信仰の根拠を理解しておらず、今この時のための働きの真価を正しくわきまえていない。試練の時が来るとき、今は他者に説教している者たちでさえ、自分たちの立場を吟味してみれば、満足のいく理由を示せない事柄が多くあることに気づくだろう。このようにして試されるまで、彼らは自らの大いなる無知を知らなかった。また、教会の中には、自分は信じていることを理解しているのだと当然のように思い込んでいる者が多いが、論争が起こるまでは、自分の弱さを知らない。同じ信仰を持つ者から引き離され、ただ一人で自分の信仰を説明することを余儀なくされたとき、彼らは、自分が真理として受け入れてきた

ものについての考えがいかに混乱しているかを知って驚くだろう。確かに私たちの間には、生ける神から離れ、人に頼り、神の知恵の代わりに人間の知恵を据えるという背離が起こってきた。

神はご自分の民を目覚めさせられる。ほかの手段が功を奏さないなら、異端が彼らの間に入り込み、それが彼らをふるいにかけて、もみ殻と麦とを選び分けるだろう。主は、ご自分の御言葉を信じるすべての者に、眠りから目を覚ますよう呼びかけておられる。今この時にふさわしい尊い光が与えられている。それは、私たちの目前に迫っている危険を示す聖書の真理である。この光は、聖書を熱心に研究し、私たちが取っている立場を最も厳密に吟味することへと私たちを導くべきである。神は、祈りと断食をもって、真理のあらゆる側面と立場を、徹底して忍耐強く探求することを望んでおられる。信じる者たちは、真理とは何かに関する憶測や漠然とした考えに安住してはならない。彼らの信仰は、試練の時が来て、その信仰について答えるために評議会の前に引き出されるとき、彼らの内にある希望について、柔和と畏れをもって理由を述べることができるよう、神の御言葉の上に堅く据えられていなければならない。

働きかけ、働きかけ、働きかけよ。私たちが世に示す主題は、私たち自身にとって生きて現実でなければならない。私たちが信仰の根本教義と見なす教理を擁護するにあたっては、完全に健全と言えないような議論を決して用いてはならない。そうした議論は反対者の口を封じることではできるかもしれないが、真理を尊ぶものではない。私たちは、反対者を黙らせるだけでなく、最も厳密で徹底した吟味にも耐える健全な論証を提示すべきである。論争家として身を磨いてきた者には、神の言葉を公正に扱わなくなる大きな危険がある。反対者に対するとき、単に信者に確信を与えることを求めるのではなく、その人の心に確信を呼び覚ますような仕方で主題を提示することこそ、私たちの真剣な努力であるべきだ。

たとえ人間の知性がどれほど進歩しようとも、いっそう大いなる光を得るために聖書を徹底して絶えず探究する必要はないなどと、片時たりとも考えてはならない。私たちは民として、各々が預言を学ぶ者となるように召されている。神が私たちに示してくださいるいかなる光の一筋も見分けられるよう、私たちは熱心に見張っていなければならない。私たちは真理の最初のきらめきを捉えるべきであり、祈り深い学びを通してさらに澄んだ光が与えられ、それを他の人々の前に示すことができる。

神の民が、現在与えられている光に安住して満足しているとき、神は彼らに恵みをお与えにはならない、と確信してよい。神は、彼らのために輝いている増し加わる、しかも絶えず増し加わっていく光を受けるために、彼らが常に前進し続けることを御旨としておられる。教会の現在の態度は、神を喜ばせるものではない。教会のうちに、より多くの真理とさらに大いなる光を必要としないと感じさせる自己確信が入り込んだ。私たちは、サタンが右にも左にも、私たちの前にも後ろにも働いている時代に生きている。それにもかかわらず、私たちは民として眠っている。神は、ご自身の民を奮い立たせて行動へと促す声が聞かれることを御旨としておられる。

天よりの光線を受けるために魂を開く代わりに、反対の方向に働いてきた者もある。出版界と講壇の双方において、聖書の靈感に関する見解が提示されてきたが、それらは聖霊の是認も神の御言葉の裏づけも持たない。明白な「主はこう仰せられる」という支えなしに、かくも重大な主題について理論を提唱することに、個人であれ一団の

人々であれ、着手すべきでないことは確かである。しかるに、人間的弱さに取り囲まれ、周囲の影響を多少なりとも受け、賢明でも天を思う心でもあらしめるにはほど遠い遺伝的および培われた傾向を有する人々が、神の御言葉を被告のように召喚し、何が神的で何が人間的であるかについて裁断を下そうと企てるとき、彼らは神の勧めを仰がずに事をなしているのである。主はそのような業を栄えさせない。その結果は、それに従事する者にも、それを神からの業として受け入れる者にも、いずれにも災厄をもたらすであろう。靈感の本質に関して提示された諸理論のために、多くの心に懐疑が呼び起こされてきた。狭く近視眼的な見解しか持たない有限の被造物が、自ら聖書を批判するに足ると感じて、「この箇所は必要であり、あの箇所は必要ではなく、靈感されていない」と言うのである。

キリストは、当時の人々が所有していた聖書の唯一の部分である旧約聖書に関して、そのような指示をお与えにならなかった。主の教えは、人々の思いを旧約聖書へと向けさせ、そこに提示されている偉大な主題を、いっそう明るい光の下に照らし出すよう意図されたものであった。久しくイスラエルの民は神から離れ、神が彼らに委ねられた尊い真理を見失っていた。これらの真理は、その真の意義を覆い隠す迷信的な形式や儀礼によって包み隠されていた。キリストは、その光彩を曇らせていた塵芥を取り除くために来られた。主はそれらを、尊い宝玉として、新たな枠に嵌めた。主は、古く親しい真理の繰り返しを軽んじるどころか、むしろそれらが本来の力と美において現れ出るようにするために来られたのだということを示された。その栄光は、主の時代の人々には未だ見いだされたことがなかった。これらの啓示された真理の御自身こそ著者であられるがゆえに、主は、人々にその真の意味を開き、指導者たちが自らの聖別されていない状態、すなわち霊性と神への愛の欠乏に都合よく合わせるために採用していた曲解や虚偽の学説から、彼らを解放することがおできになった。主は、これらの真理から生命と活力を奪っていたものを退け、それらを本来の新鮮さと力のすべてをもって、世に返された。

もし我らがキリストの御霊を有し、キリストと共に働く同労者であるなら、キリストが成し遂げるために来られた業を推し進めることは、我らの務めである。聖書の真理は、慣習と伝統と誤った教理によって、再び覆い隠されてしまった。通俗神学における誤った教えが、幾千幾万の懐疑者と不信者を生み出してきた。多くの者が聖書の教えであるとして糾弾する誤謬や矛盾があるが、それらは実のところ、教皇制の暗黒時代に採用された聖書の誤った解釈にほかならない。無数の人々は、その時代の誤謬と伝承に惑わされたユダヤ人がキリストについて誤った観念を抱いたのと同じように、神についての誤った観念を抱くに至った。「もし彼らがそれを知っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったであろう。」神の真の御性質を世に明らかにすることは、我らの務めである。聖書を批判するのではなく、教訓と模範によって、その聖なる、いのちを与える真理を世に示すことに努めよう。それによって、「あなたがたを闇からその驚くべき光へと召された方の誉れを宣べ伝える」ことができるように。

私たちの間に次第に忍び寄ってきた諸悪は、ほとんど気づかれぬままに、個々人と諸教会を神への畏敬から引き離し、神が個々人と諸教会にお与えになろうとする力を閉ざしてしまっている。

「兄弟たちよ、神の御言葉を、あるがままに保ちなさい。人間の知恵が僭越にも、聖書の一句の権威すら弱めようとしてはならない。黙示録における厳粛な警告は、かかる立場を取ることのないよう私たちを戒めるはずである。わが主の御名によって、あなたがたに告げる。『汝の足から履物を脱げ。汝の立っているところは聖なる地である。』」『Testimonies』第5巻、707-711頁。